

# 強い大将の話

小川未明

青空文庫



ある国くにに、戦争せんそうにかけてはたいへんに強い大將たいしょうがありました。その大將たいしょうがいる間は、どこの国くにと戦争せんそうをしても、けつして負けるまことはないといわれたほどであります。

それほど、この大將たいしょうは知略ちりやく・勇武ゆうぶにかけて、並ぶならものがないほどでありました。それですから、よくほかの国くにと戦争せんそうをしました。そして、いつも勝つたのであります。

あるとき、隣となりの国くにと戦争せんそうをしました。それは、いままでにない大きな戦争せんそうでありました。そして、両方りょうほうの国くにの兵隊へいたいが、

たくさん死にました。隣となりの国くにでは、今度こんどばかりは勝かたなければならぬといっしょうけんめいに戦たたかいましたけれど、やはりだめでした。そして、とうとう最後さいごに負まけてしまいました。けれど、さすがの強つよい大將たいしょうも、今度こんどはやつと勝かつたというばかりで、みな家来けらいのものもなくしてしまいました。

大將たいしょうは疲つかれて、生いき残のこつたわずかな人ひとたちとともに、都みやこをさして戦場せんじょうから歩あるいてきました。そして、戦争せんそうのために荒あれはてた、さびしいところを通とおらなければなりませんでした。森もりも林はやしも、大砲たいほうの火ひで焼やけてしまったところもあります。広ひろい野原のに、青草あおくさひとつ見みえないところもあります。まったく昔むかしの日ひと、あたりの景色けしきがすっかり変かわっていました。

ある日の暮れ方、大將は、まったく路に迷ってしまったのであります。

## 二

このとき、あちらから目を泣きはらした、貧しげな女がやつてきました。その女は、もうだいぶの年とみえて、頭髪が白うございました。

大將は、女を呼び止めて、都へゆく路をたずねました。

「あなたは、どなたさままでございますか。」と、年老つた女は、泣きはらした目を上げて尋ねました。

「おまえは、俺を知らないのか、今度大戦争をして、ついに敵を負かした、大将が俺だ。」と、大将はいわれました。年老った女は、じつとその顔を見上げていましたが、

「あなたは、地図をお持ちにならないのでございますか。」と申しました。

「ああ、この大戦でみんな焼けてしまった。」と、大将は激戦の日の有り様を目に思い浮かべて答えられました。

すると年老った女は考えていましたが、さびしい細い路を指さして、

「これを、まっすぐにおゆきなさるとゆかれます。」と申しました。

大將たいしょうは、わずかな家来けらいを引き連ひれて、その路みちを急いそがれました。けれど、どこまでいっても人家じんかがありません。やつとたどりついたところは、いつか激戦げきせんのあった、思い出おもしてもぞつとずるような戦場せんじょうであつて、ものすごい月の光つきひかりが照てらしていたのであります。

## 三

「こんなところへきては、後ろうしへもどるようなものだ。あのおばあさんは、うそをいったな。」と、大將たいしょうは怒おこられました。その夜よは野宿のじゆくをして、翌日あくるひ、またその道みちを引き返かえしたのです。

今度<sup>こんど</sup>は、あちらから、白<sup>しろ</sup>い着物<sup>きもの</sup>をきて、髪<sup>かみ</sup>を乱<sup>みだ</sup>したはだしの娘<sup>むすめ</sup>がきました。大<sup>たい</sup>将<sup>しょう</sup>は、その娘<sup>むすめ</sup>を呼<sup>よ</sup>び止<sup>と</sup>められました。

「俺<sup>おれ</sup>は、大<sup>たい</sup>将<sup>しょう</sup>だが、都<sup>みやこ</sup>の方<sup>ほう</sup>へゆく路<sup>みち</sup>は、どういったがいいか。」と、おたずねになりました。

娘<sup>むすめ</sup>は、悲<sup>かな</sup>しそうな顔<sup>かお</sup>つきをして、大<sup>たい</sup>将<sup>しょう</sup>の顔<sup>かお</sup>をながめていました。

「この路<sup>みち</sup>をまっすぐ<sup>で</sup>にゆきなされば、あなた<sup>おぼ</sup>の思<sup>おも</sup>し召<sup>め</sup>しなされるところへ出<sup>で</sup>られます。」と申<sup>もう</sup>しあげました。

大<sup>たい</sup>将<sup>しょう</sup>は、うなずかれて、この娘<sup>むすめ</sup>は正<sup>しょう</sup>直<sup>じ</sup>者<sup>もの</sup>らしいから、けっしてうそはいうまいと思<sup>おも</sup>われて、娘<sup>むすめ</sup>の指<sup>ゆび</sup>さした路<sup>みち</sup>を急<sup>いそ</sup>いでゆかれました。



やはり、どこまでゆきましても、人家らしいものは見あたりま  
 せんでした。やつと、たどり着くと、そこはまだ新しい墓場で、  
 今度の戦争に死んだ人のしかばねがうずまっついて、土の色も  
 湿っていたのであります。

「俺は、こんなところへきたいと思つたのでない。じつに不埒な  
 やつらだ。なんでこの名誉ある俺を、みんなが欺くのだ。」と、  
 さすがの大將も、ひどくお怒りになりました。

#### 四

また、すごすごと、大將はきた路をもどらなければなりま

せんでした。

そのうちに、いつしか、その日も暮れかかったのであります。

すると、あちらから、おじいさんが、つえをついてきました。大  
いしよう

将はそのおじいさん呼び止めて、自分は 大将であるが、

みやこかえ 都へ帰ろうと思つて道に迷つて、二人の女たちに路をきいたら、

みんなうそをいっただが、それはどういふものだろうと問われたのであります。

おじいさんは、つえにすがつて、背を伸ばしながら答えました。

「年老つた女は、母親であつて、その子供が戦争にいつて、

死んだのを深く悲しんでいるからでありますよ。」と答えまし

た。

「そんなら、娘は……。」と、大將は問われました。

おじいさんは、

「その娘は、結婚して、まだ間もないのであります。それを夫が戦争にいつて、死んだのを深く悲しんでいるからであります。と答えました。」

おじいさんは、大將に、都にゆく路をていねいに教えました。大將は、今度は、まちがいなく都に帰られました。そして、高い位に上りましたが、大將は、また一面において人情にも深かった人で、死んだ人々に同情を寄せられて、ついに大將の職を辞して、隠居されたということでありま

す。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

※表題は底本では、「強《つよ》い大将《たいしょう》の話《はなし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年9月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 強い大将の話

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>